

下紺屋町の歴史④ 上田城



上田城築城

上田城は天正11年(西暦1583年)頃真田昌幸により築城された。別名尼が淵城、松尾城とも呼ばれる。

南は千曲川の分流である尼が淵の切り立った断崖の河岸段丘の上で、東の大手側には蛭沢川の水を回し、北と搦め手の西には大きな沼地が広がり、その外側に矢出沢川を切り回して外堀とした平城です。

武田家の家臣であった真田昌幸は天正10年3月に武田勝頼が自刃し滅亡すると、

すぐさま織田信長に従属するが信長は同年6月に本能寺の変で死んでしまう。旧武田領は戦国大名の草刈場となり上田は上杉、徳川、北条の三つ巴の最前線の地となり、昌幸は同年7月には北条氏に帰属するも、その後実弟真田信尹の奔走により徳川家康に味方することになる。このころ对上杉に対する備えとして上田築城が始まった。しかし同年11月徳川家康は北条氏と和睦し、和睦条件として真田氏所領の沼田城を北条氏に割譲することを認めることとなる。

上田合戦

徳川家康は天正13年(1585年)真田に対し沼田・吾妻領を北条氏に引き渡すよう迫るが、真田昌幸はこれを拒絶し、上杉景勝に次男信繁(幸村)を人質として送り支援を要請する。こうして始まったのが第一次上田合戦である。徳川軍7000に対し真田軍1200で籠城し知略を用いて勝利した。

時代は移り豊臣秀吉が亡くなり天下の主導権を徳川家康が握るようになった。慶長5年(1600年)徳川家康が会津の上杉征伐の兵を起こして大坂を離れると石田三成が豊臣恩顧の大名で西軍を組織し挙兵し、関ヶ原の合戦に向かうこととなる。家康に従い上杉討伐に向かっていた真田親子は下野の犬伏で軍議を行い父の昌幸、次男の信繁(幸村)は西軍に加勢することを決し上田に帰陣するが、長男信幸はそのまま家康に従うこととなった。(世に言う「犬伏の別れ」)

徳川秀忠率いる徳川家本隊は中山道を経由で関ヶ原に向かう途中で離反した昌幸を攻略するため上田城を攻めたが、秀忠の惨敗となり関ヶ原に到着したのは合戦4日後であった。(第二次上田合戦)

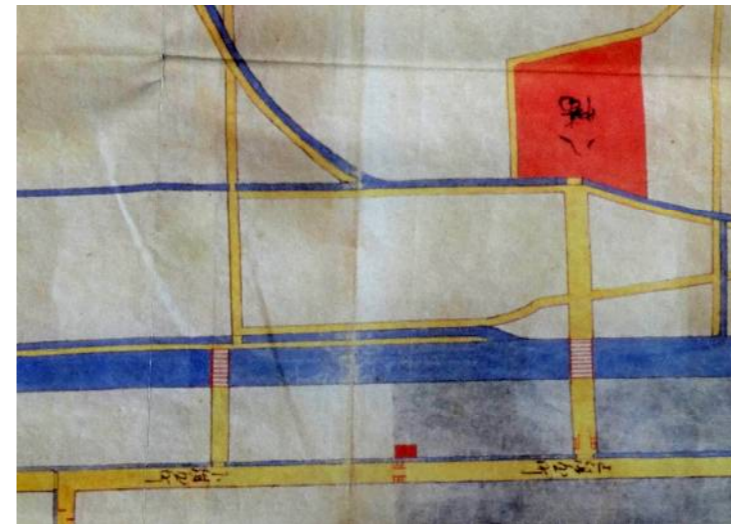
上田城破却と修復

関ヶ原の合戦後2度までも徳川に煮え湯を飲ませた上田城は完全に破却された。

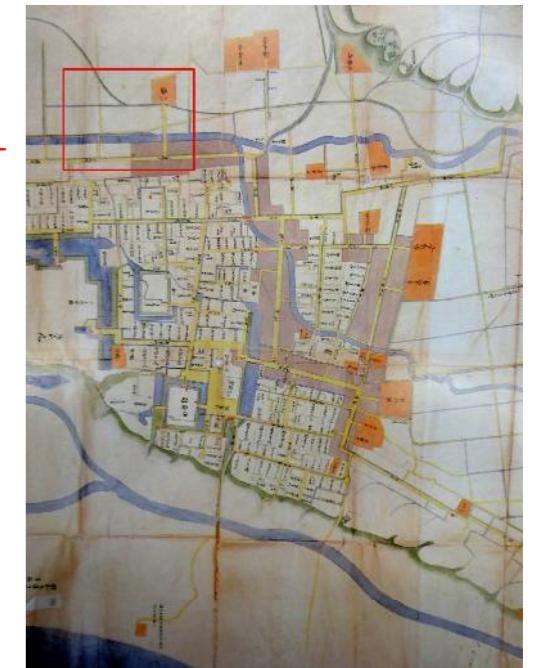
上田城主となった真田信幸は修復はせず、現上田高校の地のお屋敷で政務を行った。信幸が松代に転封された後入城した仙石氏が幕府の許しを得て修復を行ったが天守などはつくられず、現在の姿のもととなっている。



尼が淵側からの上田城



弘化四年(西暦1847年)の上田城下町用水絵図

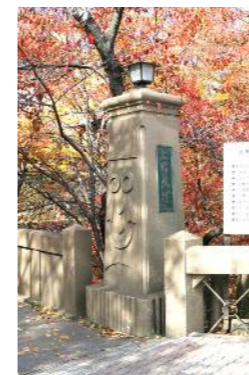


上田の城下町

天正11年(西暦1583年)頃始まった真田昌幸の上田築城は、同時に城下町上田の発となる。第一に行なわれたのは城郭周辺への武士の集住であったと考えられるが、これには兵農分離の目的があり、江戸時代の身分制度の下準備がすすめられた。次に真田氏とゆかりの深い小県郡原之郷と海野郷のひとびとを移住させ、町家の中心とした。これが原町と海野町で、それぞれ故郷の郷名をとって町名にしたのである。一方もといた場所は地名に元(本)の字を加え、本原・本海野とよぶようになる。続いて本海野の鍛冶職人と紺屋職人を招いてつくられたのが鍛冶町と紺屋町で、職人町の形成および城下町東西両端の決定という二重の意味をもっていた。

上田城下の用水は東から西に流れており、きれいな水が必要な鍛冶町は城下町の東端に、染物のすすぎで水を汚す紺屋町は城下町の西端に配置された。また、火を使うため火災を起こす恐れのある鍛冶町は、一般に風下側に置かれたといわれている。

江戸末期には町の西に、多くの人々が住むようになり、下紺屋町と名づけ、それまでの紺屋町を上紺屋町と呼ぶようになった。弘化4年(1847年)の上田城下町用水絵図には下紺屋町の記載がみられる。町分は上紺屋町までであり、下紺屋町との境には木戸の番所が設けられていた。また、下紺屋町と鎌原町の境(現栄食堂)の通りは家中小路と言われて、通用門があり木戸番所が設置されていたという。



上田城址公園入り口のこの丸橋の欄干に人の顔のような模様があります。これは〇が二つで「二の丸」そしてカタカナで「ハシ」昭和2年9月に竣工しました。



二の丸橋の下は堀跡で今はけやき並木となっていますが昭和47年2月19日までは電車が走り、橋の下には公園前駅がありました。

※さよなら電車より